原著

スポーツ・ペアレンティング尺度及び スポーツ・ハラスメント尺度の作成（注1）

藤 後 悦 子[1)]・大 橋 恵[2)]・井 梅 由美子[3)]

Development of a Sport Parenting Scale and Harassment in Sport Scale

Etsuko Togo, Megumi M. Ohashi and Yumiko Iume

Abstract

Community sports groups, organizations in which parents are strongly involved, have various hidden problems, including inappropriate parental interaction, corporal punishment inflicted by coaches, and peer bullying. There is an urgent need to develop a sport parenting scale and harassment in sport scale in order to identify ways of improving parent-child and coach-child interaction. This study presents an attempt to construct a prototype of these scales. We conducted a questionnaire survey on sport- parenting and harassment in sports among 600 mothers and 300 fathers of elementary school children who participate or have participated in community sporting activists. The survey yielded a three-factor structure for the sport-parenting scale: “controlling interactional style,” “team-focused interactional style,” and “empathetic interactional style,” and a three-factor structure for the harassment in sport scale: “Harassment from bench people,” “harassment from peers,” and “harassment from coach.” Both scales had strong reliability. We confirmed the scales’ goodness-of-fit by conducting a confirmatory factor analysis, and then confirmed their stability by conducting separate factor analyses for each gender of the parents and each gender of the children..

Keywords: sport-parenting, sport-harassment, development of scale

問題と目的

スポーツを取りまく問題として、指導者による体罰や部活動に絡んだいじめは取り上げられることが多いが、スポーツを応援する親やOBなどベンチサイドの暴言や子どもを追い込んでしまうような親の不適切な対応も見逃せない問題である。特に親の関与度が強い地域スポーツでは、子どもと過ごす時間が長いため、親は子どもと同一化しやすく（大橋・井梅・藤後，2015）、それゆえに子どもの不出来に対する不適切な対応やベンチサイドからの親達による暴言が部活動に比べて高いのではないかと思われる。本稿でははじめにスポーツを通した親子関係について概観し、続いて不適切な親子関係をも含んだスポーツ・ハラスメントについて検討していく。

1）藤後 悦子 東京未来大学こども心理学部
2）大橋 恵 東京未来大学こども心理学部
3）井梅由美子 東京未来大学こども心理学部

通常、親の養育行動はペアレンティングと呼ばれており、19世紀から20世紀前半にかけて盛んに研究されてきた。1970年代に入り、Bronfenbrenner（1979）が生態学的視点を導入し、その後Belsky（1984）が、ペアレンティングのプロセスモデルとして、親要因、子ども要因、社会文脈要因の３領域を軸とした概念モデルを提唱した。一般的にペアレンティングは、受容/応答型と要求/支配型の2つの方向性に分けられる（Harwooda & Knight, 2015）。

スポーツ・ペアレンティング

ペアレンティングの中でも特にスポーツを通した親子関係は「スポーツ・ペアレンティング（sport parenting）」として取り扱われている（藤後・川田・井梅･大橋，2017）。スポーツ･ペアレンティングとは、子どものスポーツ場面にまつわる子育てスタイルと、それが関係する親の子どもへの関わり方と定義されている（Holt, Tamminen, Black, Mandigo, & Fox, 2009）。スポーツ・ペアレンティングの理想スタイルとしては、子どもへは応答的でありかつ親としての要求も明確に提示するという権威主義的（authoritative）スタイルや、子どもに選択肢を与え自己決定を促し、その内容を一緒に検討していくような自律性支持的（autonomy-supportive）スタイルとされ、不適切なスタイルは、子どもへの応答性が低く要求が高すぎる独裁主義的（authoritarian）スタイルや親の価値観を押し付け、子どもの行動を監視するような支配的（controlling）スタイルとされている（Harwooda & Knight，2015）。独裁主義的関わりと支配的関わりはどちらも親が過度に子どものスポーツに関わることを意味し、子どもにとって大きなストレス源になる（Brustad，1993）。幼少期から子どもがスポーツを行う場合、親は、道具の購入や月謝、遠征費などの経済的な負担、当番、練習や試合会場への送迎などの時間的や肉体的な負担を背負うこととなる。ゆえにその見返りとして、子どもに対して過度の期待が生じやすい。独裁主義的関わりや支配的関わりはそれが過剰になると、子どもの問題行動につながりやすいのである。

スポーツ・ハラスメント

筆者らはスポーツを行う子ども達が神経症的症状を抱え追い込まれていく過程の中で、周囲の人間関係による不適切な対応に注目し､それらを「スポーツ･ハラスメント」という概念で検討してきた（藤後ら，2017）。スポーツ・ハラスメントを「スポーツに関わる嫌がらせ」と定義し、被害者が選手だった場合、その加害者としてコーチ、仲間、応援席の親、選手自身の親が想定できるとした。具体的には、コーチによる体罰、仲間によるいじめ、親からのしごき、そして応援席の親集団によるバッシングが含まれる。その中でも親集団やOBなどによる応援席からの不適切な言動を「応援席ハラスメント」とした。地域スポーツの研究ではないが、大学生を対象に過去のスポーツ場面を調査した藤後・井梅・大橋（2015）によると、多くが中学時代スポーツを通して、ミスに対して舌打ちされる、無視されるなど、仲間や指導者との関係で否定的な体験を有していた。中学生のバスケットボール選手を対象とした研究からは、小学生時代を含めたスポーツ経験の中で、周囲の親から「暴言をたくさん言われる」「文句を言われたり、溜息をつかれる」などの否定的な体験を有していることが明らかになった（藤後・浅井・勝田・川田・藤後・大浦・関谷・谷中・徳永，2016）。さらには、子ども達はスポーツの否定的な体験を通して、身体症状や神経症的症状を発症していくことも報告されている（三浦，2013）。

本研究の目的

以上より、スポーツ・ペアレンティングとスポーツ・ハラスメントは子どものスポーツにおいて重要な概念であるが、これらを測定する尺度は未だ見当たらない。よってこの2つの尺度を作成することで、１．スポーツ・ハラスメントの実態が明らかになる、２．スポーツ・ハラスメント防止の実践やよりよい子育ての方法を提唱する教材開発や介入を行った際の

評価指標となりうる、という利点があろう。

そこで、本研究ではスポーツ・ペアレンティングとスポーツ・ハラスメントの尺度を作成することを目的とする。

方　法

調査期間

2014年３月

調査対象

調査会社に委託して全国地域を対象としたオンライン調査を実施した。調査範囲は全国区であり、北海道5.2%、東北8.6%、関東33.8%、北陸･甲信6.1%、東海12.0%、関西18.3%、中国5.0%、四国2.5%、九州8.4%の割合であった。小学校時代にスポーツチームに所属している、あるいは過去にしていたことがある、小学校４年生～高校生の子どもを持つ父親300名（平均年齢46.9歳、31 ～ 68歳、*SD*=5.24）および母親600名（平均年齢44.4歳、29 ～ 58歳、*SD*=5.00）を対象に調査を実施した。チームの強さで条件を揃えるために、子どもが所属しているチームが県大会以上の強いチームである者と地区大会以下の弱いチームである者が同数になるように割り付けた。回答に不備のあった者（全項目で同じ評定値を選んでいるなど）を除外し、最終的な分析対象者は、男性287名（平均年齢46.98歳、31 ～ 68歳、*SD*=5.25）、女性586名（平均年齢44.37歳、30 ～ 58歳、*SD*=4.98）、計873名であった（結果のTable1参照）。

子どもの競技レベルとチームの競技レベル（以降、子どもレベル、チームレベルと呼ぶ）

子どもの競技レベルをスタメン／レギュラー、準レギュラー、補欠、それ以下の４段階で尋ねた。また、所属するチームの競技レベルを全国大会レベル、県（都）大会レベル、地区大会上位レベル、それ以下の４段階で尋ねた。

スポーツ・ペアレンティング尺度の原案の作成

調査項目の作成にあたって、子どものスポーツ場面で起こりうる保護者の行動や言動の実際を把握するため、都内在住で子どもを地域のスポーツクラブに参加させている母親７名から（子どもが参加している種目はサッカー２名、野球１名、バスケットボール３名）、インタビュー形式にて、「お子さんのスポーツに関連して、家でどのような子育てをしているか」を自由に挙げてもらった。この予備調査の内容を参考に、スポーツ・ペアレンティングに関する項目を選定した。これらを踏まえ子育て支援や親子関係を専門とする研究者２名と社会心理学を専門とする研究者１名の合議に基づいて以下の15項目を選定した。内容は、支配的な関わり（プレーでミスした時は、上手になるまで遊ぶ時間やお小遣いを制限するなど罰を与えた、できるまで何度でも練習させていた）、チーム主義的関わり（チームのために何ができるかを考えるように伝えていた）、共感的な関わり（子どもに寄り添う）に関する項目を含む（項目は結果のTable2参照）。全くあてはまらない（１点）～非常にあてはまる（６点）の６件法で尋ねた。

親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の原案の作成

上記と同様の母親たちに、「お子さんの参加するスポーツのクラブにあなた自身が関わる中で、①問題と思われる（他の）保護者の行動や言動、②親子の関わりで問題だと感じること」について自由に挙げてもらった。この予備調査の内容を参考に、親認知のスポーツ・ハラスメント行動に関する項目を選定した。加えて、子どもの視点からのスポーツ・ハラスメントとして大学生に挙げてもらったスポーツにおける過去のネガティブ体験内容（藤後ら，2015）を参考にして、コーチ、仲間、応援席からなるスポーツ・ハラスメントに関する項目を取り出した。これらを踏まえ子育て支援や親子関係を専門とする研究者２名と社会心理学を専門とする研究者１名の合議に基づいて18項目からなる原案を作成した。

コーチからのハラスメントとして、身体的な暴力、

言語的な暴力、心理的暴力、関係性による暴力などが想定される。しかし藤後ら（2015）では身体的な暴力がほとんど示されなかったため、身体的な暴力以外で平均点が高かった心理的暴力「ためいきや舌打ちをされる」、言語的暴力「ばか、センスがないなど人格や能力を否定される言葉で怒鳴られた」、関係性暴力「無視された」を中心に取り入れた。仲間からのスポーツ・ハラスメントは大学生対象の予備調査で多かった「話しかけても無視された」「やりたくないことを強制された」「ボールなどをわざとまわそうとしなかった」などを取り入れた。応援席からのスポーツ・ハラスメントは「ためいきや舌打ちをされた」「ダメ出しされた」などの６項目とした。これらの項目全てを、全くあてはまらない（１点）～非常にあてはまる（６点）の６件法で尋ねた。項目内容はTable4に示した。

倫理的配慮

東京未来大学の倫理委員会の審査を経て調査を実施した。回答は自由意志であること、匿名性が保たれること、学術的な利用を行うことを述べ、同意した者にのみ回答を求めた。

結　果

回答者の属性

まず親の性別ごとに実子の属性を確認したところ、Table1に示す通り、スポーツの種類、チームレベル、子どもレベル全てにおいて父母でほぼ同じ割合となった。

スポーツ・ペアレンティング尺度の因子構造の探索と確定

はじめにスポーツ・ペアレンティング15項目について主因子法プロマックス回転による因子分析を

Table1　対象者の属性

			男子	女子	父親	母親	合計
スポーツの種類	サッカー	人数	264	13	94	183	277
		(%)	(41.3%)	(5.6%)	(32.8%)	(31.2%)	(31.7%)
	野球	人数	213	6	62	157	219
		(%)	(33.3%)	(2.6%)	(21.6%)	(26.8%)	(25.1%)
	バスケ	人数	38	73	40	71	111
		(%)	(5.9%)	(31.3%)	(13.9%)	(12.1%)	(12.7%)
	バレー	人数	5	48	18	35	53
		(%)	(0.8%)	(20.6%)	(6.3%)	(6.0%)	(6.1%)
	その他	人数	120	93	73	140	213
		(%)	(18.8%)	(39.9%)	(25.4%)	(23.9%)	(24.4%)
チームレベル	全国	人数	109	48	46	111	157
		(%)	(17.0%)	(20.6%)	(16.0%)	(18.9%)	(18.0%)
	県大会	人数	216	64	96	184	280
		(%)	(33.8%)	(27.5%)	(33.4%)	(31.4%)	(32.1%)
	地区上位	人数	144	51	66	129	195
		(%)	(22.5%)	(21.9%)	(23.0%)	(22.0%)	(22.3%)
	それ以下	人数	171	70	79	162	241
		(%)	(26.7%)	(30.0%)	(27.5%)	(27.6%)	(27.6%)
子レベル	レギュラー	人数	360	140	176	324	500
		(%)	(56.3%)	(60.1%)	(61.3%)	(55.3%)	(57.3%)
	準レギュラー	人数	175	52	74	153	227
		(%)	(27.3%)	(22.3%)	(25.8%)	(26.1%)	(26.0%)
	それ以下	人数	105	41	37	109	146
		(%)	(16.4%)	(17.6%)	(12.9%)	(18.6%)	(16.7%)

行った。0.4以上の因子負荷量が２因子に及ぶ１項目（「子どもには、コーチから怒られても、あまり気にしないようにと伝えていた」）を削除し、再度主因子法プロマックス回転を行った。スクリープロットにより固有値の減衰状況（4.49、2.71、1.45、0.82…）を確認した結果、３因子が妥当であると考えた。因子パターンと因子間相関をTable2に示す。なお、回転前の３因子で14項目の全分散を説明する割合は61.80%であった。

第１因子は、遊び時間やおやつを制限したり、何度でも練習させたりという支配的なペアレンティングスタイル６項目が示されたので、「支配的対応」と命名した。第２因子は、チームのために何ができるか考える、失敗したチームメイトを励ます内容の６項目であったため、「チーム主義的対応」と命名した。第３因子は、子どもが落ち込んだ時にそばにいる、じっくり話を聞くという３項目であったため、「共感的対応」と命名した。α係数は、第一因子.847、第二因子.817、第三因子.745と十分に高かった。「チーム主義的対応」は「支配的対応」および「共感的対

Table２　スポーツ・ペアレンティングの尺度の因子パターン（主因子法、プロマックス回転）、平均値（標準偏差）、α係数および因子間相関

	因子				
	F1	F2	F3	*M*（*SD*）	Cf
F1　支配的対応（α = .847）					
5 子どもが、プレーでミスした時は、上手になるまで、遊ぶ時間やおこずかいを制限するなどばつを与えていた（伝えている）。	**.819**	−.151	−.039	1.90（1.19）	.73
7 子どもには、嫌なことがあってもレギュラーをとるためなら我慢した方がよいと伝えていた（伝えいている）。	**.791**	−.038	.040	2.30（1.29）	.76
8 子どもどもが上手にできていなかったら、できるまで何度でも練習させていた（練習させている）。	**.720**	.114	.012	2.56（1.34）	.78
9 子どもには、毎回試合について反省させていた（反省させている）。	**.654**	.251	−.034	2.55（1.37）	.76
4 子どもが試合や練習でうまく行かなかったプレーについて、試合や練習後に改めて怒っていた（怒っている）。	**.600**	.070	.005	2.79（1.38）	.63
6 子どもには、やられたらやり返せと伝えていた（伝えている）。	**.568**	−.095	.068	2.63（1.46）	.52
F2　チーム主義的対応（α = .817）					
14 子どもには、チームのために、何ができるかを考えるように伝えていた（伝えている）。	−.111	**.962**	−.112	3.54（1.34）	.86
15 子どもには、同じように失敗したり緊張している子がいたら、励ましてあげるよう伝えていた（伝えている）。	−.145	**.737**	.127	3.80（1.33）	.75
13 子どもには、コーチに自分のプレーをどのように改善すればよいか相談するように伝えていた（伝えている）。	.056	**.682**	−.012	3.26（1.31）	.72
10 子どもには、目的を持って練習するように伝えていた（伝えている）。	.135	**.575**	.001	3.59（1.45）	.62
12 子どもには、コーチの指示は、絶対に従うように伝えていた（伝えている）。	.168	**.455**	.045	3.25（1.24）	.53
F3　共感的対応（α = .745）					
2 子どもが失敗して落ち込んでいたら、じっくりと話を聞いていた（聞いている）。	−.044	.063	**.908**	4.18（1.14）	.98
1 子どもが落ち込んでいたら、そばにいるようにした（している）。	.040	−.026	**.858**	4.07（1.20）	.81
3 子どもには、つらかったらチームを辞めてもいいことを伝えている（伝えていた）。	.064	−.037	**.448**	3.82（1.41）	.41
因子間相関 F1	−	.363	−.043		
F2		−	.376		

注）Cf列における値は確認的因子分析（Confirmatory　Factor　Analysis）における当該因子への因子負荷量を表す。また、「11. 子どもには、コーチから怒られても、あまり気にしないようにと伝えていた」は因子負荷量が低かったために削除した。

応」との間に弱い正の相関が見られた。

スポーツ・ペアレンティング尺度の３因子14項目が適切なモデルであるかどうかを確認するために確認的因子分析を行った。その結果、スポーツ・ペアレンティング尺度はGFI＝.914、AGFI＝.878、CFI＝.903、RMSEA=.088であり、許容範囲であるといえる。

次にこれらの因子構造が父親と母親、そして女子の親、男子の親というように対象者が異なった場合にでも安定しているかを確認するために、回答者本人と子どもの性別ごとにスポーツ・ペアレンティング尺度の因子分析を行った。その結果、Table3に示す通り、両者ともに３因子構造が確認され、それぞれの下位尺度の項目内容も同じであった。

親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の因子構造の探索と確定

次に親認知のスポーツ・ハラスメント尺度について主因子法プロマックス回転による探索的な因子分析を行った。固有値の変化（9.92、2.30、1.32、0.67…）

Table３　父母別・子どもの男女別スポーツ・ペアレンティングの尺度の因子パターン（主因子法、プロマックス回転）

	父親			母親			男子の親			女子の親		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3
F1　支配的対応												
5	**.844**	−.166	−.009	**.783**	−.133	−.061	**.827**	−.177	−.014	**.818**	−.082	−.126
7	**.841**	−.050	.025	**.754**	−.029	.049	**.787**	−.064	.032	**.822**	.012	.064
8	**.718**	.223	−.046	**.716**	.071	.046	**.711**	.131	−.019	**.740**	.071	.100
9	**.616**	.300	−.023	**.660**	.236	−.040	**.630**	.264	−.050	**.717**	.214	.021
4	**.739**	−.014	.042	**.549**	.122	−.062	**.595**	.076	.007	**.609**	.061	.001
6	**.573**	−.060	.070	**.557**	−.118	.075	**.545**	−.062	.073	**.604**	−.149	.034
F2　チーム主義的対応												
14	−.128	**1.005**	−.163	−.091	**.936**	−.072	−.107	**.926**	−.091	−.101	**1.048**	−.160
15	−.125	**.709**	.090	−.147	**.749**	.148	−.137	**.714**	.128	−.143	**.781**	.126
13	.126	**.640**	.045	.019	**.695**	−.022	.072	**.645**	−.011	.044	**.757**	−.020
10	.087	**.618**	−.001	.157	**.551**	.019	.084	**.609**	.002	.244	**.519**	.018
12	.137	**.496**	.136	.173	**.433**	.006	.186	**.425**	.054	.141	**.522**	.015
F3　共感的対応												
2	−.119	.142	**.864**	−.016	.043	**.912**	−.029	.041	**.935**	−.087	.142	**.817**
1	−.002	.039	**.779**	.060	−.047	**.889**	.052	−.015	**.841**	.002	−.048	**.902**
3	.233	−.161	**.499**	−.015	.039	**.383**	.030	−.004	**.420**	.142	−.115	**.539**
因子間相関												
F1	—	.346	.133	—	.370	−.065	—	.420	−.016	—	.212	−.105
F2		—	.504		—	.320		—	.344		—	.000

より、３因子構造が妥当であると考えた。最終的な主因子法・プロマックス回転による因子パターンと因子間相関をTable4に示す。なお、回転前の３因子で18項目の全分散を説明する割合は75.21％であった。

第１因子は、チームの親達から自分の子ども（実子）への不適切な対応に関する６項目であったために、「応援席ハラスメント」と命名した。第２因子は、チームメイトによる実子への不適切な対応に関する６項目であったために、「仲間ハラスメント」と命名した。第３因子はコーチによる実子への不適切な対応に関する６項目であったために、「コーチハラスメント」と命名した。α係数は、第一因子.943、第二因子.938、第三因子.901と十分に高かった。なお、三つの下位

Table 4　親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の因子パターン（主因子法、プロマックス回転）、平均値（標準偏差）、α係数および因子間相関

		因子					
		F1	F2	F3	共通性	平均値（*SD*）	Cf
	F1　応援席ハラスメント（α = .943）						
15	うちの子がプレーに失敗したとき、チームの親達からためいきや舌打ちをされたことがある。	**.958**	−.045	−.025	.833	2.27（1.29）	.86
14	うちの子どもの態度に関して、親達から必要以上に注意されたことがある。	**.929**	−.038	.011	.824	2.15（1.25）	.91
18	うちの子は、チームの親達との関係で、嫌な思いをしたことがある。	**.841**	−.038	.007	.669	2.37（1.38）	.80
17	試合後チームの親から、うちの子のプレーに対してダメだしされたことがある。	**.822**	.091	−.038	.756	2.21（1.28）	.81
16	チームの親達から、うちの子は無視されたことがある。	**.781**	.050	.084	.750	1.97（1.18）	.86
13	うちの子のプレーに対して、親達から感情的に怒鳴られたことがある。	**.560**	.287	.025	.651	2.18（1.30）	.91
	F2　仲間ハラスメント（α = .938）						
8	うちの子が、チームメイトに話しかけても無視されたことがある。	−.049	**.952**	−.036	.809	2.29（1.30）	.92
9	チームメイトから、うちの子どもはやりたくないことを強制されたことがある。	.059	**.911**	−.072	.847	2.25（1.27）	.89
7	うちの子は、チームメイトから、ひそひそ話をされたことがある。	-.213	**.806**	.196	.600	2.55（1.37）	.87
10	うちの子が失敗すると、チームメイトからため息や舌打ちをされたことがある。	.184	**.734**	−.012	.757	2.45（1.34）	.83
12	チームメイトは、うちの子にわざとボールなどをまわそうとしなかったことがある。	.218	**.719**	−.039	.755	2.28（1.31）	.87
11	うちの子は、チームメイトとの関係で嫌な思いをしたことがある。	.125	**.717**	.017	.674	2.97（1.48）	.72
	F3　コーチハラスメント（α = .901）						
2	うちの子どもが失敗するとコーチから、ためいきや舌打ちをされたことがある。	−.049	−.089	**.924**	.740	3.02（1.58）	.82
3	うちの子どもは、コーチから、「ばか」「センスがない」など人格や能力を否定するような言葉で怒られたことがある。	.034	−.087	**.869**	.715	2.74（1.57）	.84
6	うちの子は、コーチとの関係で嫌な思いをしたことがある。	.057	.014	**.808**	.718	3.24（1.52）	.73
1	うちの子どもは、コーチに必要以上に怒鳴られたことがある。	−.113	.106	**.745**	.552	2.72（1.48）	.85
4	コーチから、うちの子だけ無視されたことがある。	.213	.060	**.629**	.644	2.40（1.40）	.80
5	コーチは、うちの子どもだけ全く試合に使わない。	.034	.169	**.510**	.403	3.01（1.54）	.63
	因子間相関 F1	−	.726	.538			
	F2		−	.513			

注）Cf列における値は確認的因子分析（Confirmatory　Factor　Analysis）における当該因子への因子負荷量を表す。

尺度間には中程度以上の正の相関があった。

次に親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の３因子18項目が適切なモデルであるかどうかを確認するために確認的因子分析を行った。その結果、スポーツ・ハラスメント尺度は、GFI＝.836、AGFI＝.788、CFI＝.911、RMSEA=.105であり許容範囲であるといえる。

これらの因子構造が対象者が異なった場合にでも安定して同じ因子構造をとるかどうかを確認するために、回答者及び子どもの性別ごとに親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の因子分析を行った。その結果、Table5に示す通り、両者ともに３因子構造が確認され、それぞれの下位尺度の項目内容も同じであった。

各下位尺度の回答者および子どもの性別による得点差の検討

次に回答者と子どもの性別によるスポーツ・ペアレンティングの下位尺度と親認知のスポーツ・ハラスメントの下位尺度得点の差を検討するために、回

Table 5　回答者の性別・子どもの性別による親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の因子パターン（主因子法、プロマックス回転）

	父親			母親			男子の親			女子の親		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3	F1	F2	F3
F1　応援席ハラスメント												
15	**.937**	−.014	−.032	**.963**	−.055	−.022	**.935**	−.027	−.035	**.970**	−.051	.002
14	**.913**	.017	−.029	**.929**	−.051	.023	**.894**	−.020	.015	**1.002**	−.073	−.003
18	**.913**	−.064	−.045	**.810**	−.023	.023	**.857**	−.069	.007	**.798**	.035	.016
17	**.760**	.142	−.001	**.831**	.086	−.055	**.801**	.117	−.039	**.873**	.042	−.052
16	**.829**	.008	.081	**.766**	.063	.083	**.764**	.065	.081	**.810**	.040	.077
13	**.601**	.239	.083	**.553**	.292	.007	**.524**	.269	.086	**.666**	.290	−.102
F2　仲間ハラスメント												
8	−.048	**.947**	−.056	−.036	**.943**	−.028	−.042	**.935**	−.025	−.051	**.964**	−.024
9	.090	**.907**	−.091	.046	**.914**	−.065	.055	**.911**	−.074	.086	**.894**	−.056
7	−.107	**.705**	.199	−.212	**.812**	.194	−.209	**.789**	.226	−.199	**.815**	.133
10	.186	**.759**	−.016	.172	**.735**	−.012	.137	**.775**	−.019	.299	**.643**	−.010
12	.437	**.481**	.002	.162	**.778**	−.050	.186	**.758**	−.064	.299	**.629**	.013
11	.216	**.679**	.008	.100	**.723**	.021	.107	**.734**	−.003	.192	**.688**	.036
F3　コーチハラスメント												
2	−.067	−.122	**.960**	−.045	−.075	**.914**	.001	−.117	**.912**	−.166	−.004	**.968**
3	.076	−.169	**.921**	.018	−.058	**.852**	.037	−.088	**.877**	.049	−.087	**.837**
6	.068	.064	**.709**	.057	.002	**.836**	.026	.030	**.822**	.184	−.024	**.725**
1	−.191	.257	**.696**	−.099	.074	**.755**	−.070	.038	**.783**	−.189	.243	**.667**
4	.273	.160	**.502**	.191	.030	**.667**	.151	.119	**.635**	.386	−.069	**.572**
5	.144	.121	**.468**	.019	.169	**.520**	−.026	.203	**.524**	.224	.125	**.418**
因子間相関												
F1	−	.779	.591	−	.698	.501	−	.716	.521	−	.710	.552
F2		−	.555		−	.478		−	.524		−	.445

Table 6　回答者の性別および子どもの性別によるスポーツ・ペアレンティング尺度とスポーツ・ハラスメント尺度の二要因分散分析

	父（*N*=287）		母（*N*=586）		*F*値		
	男子（*N*=211） *M*（*SD*）	女子（*N*=76） *M*（*SD*）	男子（*N*=429） *M*（*SD*）	女子（*N*=157） *M*（*SD*）	父母	子性別	交互作用
スポーツ・ペアレンティング							
支配的対応	2.65 (1.02)	2.78 (1.05)	2.36 (0.97)	2.29 (1.00)	23.00 **	0.15	1.66
チーム主義的対応	3.50 (1.01)	3.61 (0.79)	3.48 (0.98)	3.44 (1.20)	1.27	0.14	0.85
共感的対応	3.67 (1.01)	3.78 (0.90)	4.17 (0.98)	4.22 (1.07)	33.99 **	1.04	0.11
スポーツ・ハラスメント							
応援席ハラスメント	2.34 (1.04)	2.50 (1.15)	2.05 (1.08)	2.22 (1.31)	9.54 **	3.42	0.00
仲間ハラスメント	2.43 (1.02)	2.77 (1.10)	2.38 (1.20)	2.58 (1.33)	1.56	7.72 **	0.58
コーチハラスメント	2.94 (1.14)	3.09 (1.09)	2.85 (1.29)	2.62 (1.26)	7.52 **	0.16	3.58

答者の性別（2）と子どもの性別（2）を独立変数とする二要因分散分析を実施した(Table6)。その際、因子分析において特にその因子に負荷が重かった項目の平均値を各下位尺度の得点として用いた。具体的には、スポーツ・ペアレンティング尺度では、支配的対応６項目、チーム主義的対応５項目、共感的対応３項目、スポーツ・ハラスメント尺度では、応援席ハラスメント６項目、仲間ハラスメント６項目、コーチハラスメント６項目の平均値を用いた。その結果、スポーツ・ペアレンティングの下位尺度である「支配的対応」と「共感的対応」において回答者の性別の有意な主効果が示された（F（1,869）＝23.00, p＜.001；F（1,869）＝33.99, p＜.001）。支配的対応は、母親より父親の得点が高く、共感的対応は、父親より母親の得点が高かった。

次に親認知のスポーツ・ハラスメントの下位尺度は、応援席ハラスメントとコーチハラスメントでは回答者の性別の有意な主効果が示され（F（1,869）＝9.54, p＜.001；F（1,869）＝7.52, p＜.001）、子どもハラスメントでは子どもの性別による有意な主効果が示された（F（1,869）＝7.72, p＜.001）。応援席ハラスメントとコーチハラスメント得点は、父親が母親より高く、仲間ハラスメント得点は男子より女子の方が高かった。

考　察

スポーツ・ペアレンティング尺度と親認知のスポーツ・ハラスメント尺度について

本研究の目的は、スポーツ・ペアレンティング尺度と親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の作成であり、その信頼性と妥当性を検討することであった。その結果、スポーツ・ペアレンティング尺度は３因子14項目、スポーツ・ハラスメント尺度は３因子18項目からなる尺度を確定することができた。尺度の確定にあたっては、α係数の確認、探索的な因子分析に加え、確認的因子分析を実施し、尺度の適合性を確認した。加え父親と母親、および子どもの性によって因子構造に違いが見られるかを確認するため因子分析を行った結果、両者および両尺度ともに３因子構造が示され、尺度構造の安定性がここでも確認できた。

以上より、本研究において、スポーツ・ペアレンティング尺度と親認知のスポーツ・ハラスメント尺度の妥当性と信頼性の確認ができたといえる。

また各尺度の詳細であるが、スポーツ・ペアレンティングは子どもの競技力向上を意識した「支配的対応」と、チームスポーツを意識した「チーム主義的対応」、そして子どもの負の状態に寄り添う「共感的対応」の３つに分類された。とりわけ、最終的に

は勝利を意識しているという意味で「支配的対応」と「チーム主義的対応」は関連が考えられ、その通りの結果が示された。また「支配的対応」と「チーム主義的対応」においては、父親が母親に比べて高く、「共感的対応」は母親が父親より高かった。これらは父親は厳しさという条件付きの愛情、母親は無条件の保護というように従来からの父性や母性と合致した内容であった。つまり日常の関わりがスポーツという場面に変化したのみで、いわゆる父性的な関わりや母性的な関わりの延長上にスポーツ・ペアレンティングは位置づけられた。ただし、日常的なペアレンティングと比較してより支配的な関わりの得点が高いかどうかは、本研究で場面による比較検討はしていないために今後の課題となろう。

親認知のスポーツ・ハラスメント尺度は、「応援席ハラスメント」「仲間ハラスメント」「コーチハラスメント」の３つの下位尺度に分類され、３つの下位尺度間で得点が高かったのは「コーチハラスメント」であり、続いて「仲間ハラスメント」、「応援席ハラスメント」となった。下位尺度間の相関が高く、「コーチハラスメント」が多いチームは「応援席ハラスメント」も「仲間ハラスメント」も多いことがわかった。これは、チーム全体の雰囲気として子どものミスや敗北に対して批判的で攻撃的なチームと寛容なチームがあるということを示すのであろう。

今後の課題

スポーツ・ペアレンティングやスポーツ・ハラスメントの実証的研究の積み重ねは未だ少ない状況であり、尺度の改善も含めて検討すべき点は多くある。

第１に、スポーツ･ペアレンティングについてだが、スポーツ・ペアレンティングは発達年齢や子どもの競技能力、親の競技能力などによってどのような違いが出てくるのであろうか。スポーツ・ペアレンティングに影響を与える子ども要因、環境要因、そして親自身の要因など多角的な研究が求められる。特に今回の研究では、小学生の地域スポーツの経験者として小学校高学年から高校生までの子どもを持つ親を対象に小学校の地域スポーツの経験年数等を尋ねたが、現在の子どもの年齢を尋ねなかった。小学生の親と高校生の親で当時を振り返るとうい点では質が異なってしまう可能性があり、今後は小学生のみに絞った研究が求められるであろう。

第２に、スポーツ・ハラスメントの予防についてだが、スポーツ・ハラスメントが生起する条件を特定することで、スポーツ・ハラスメント防止のための対策が可能となってくる。またスポーツ・ハラスメントとスポーツ・ペアレンティングの関連も検討の余地があり、スポーツ・ハラスメントが高まると子どもが傷つき、共感的な対応が高まるのか、または子どもが傷つくことで、子どもの競技力を高めようと支配的な対応を行うことになるのかなど、両者の関連も明らかにする必要があろう。

第３に、上記の点を検討するにあたり、スポーツ・ペアレンティング尺度およびスポーツ・ハラスメント尺度のさらなる検討が求められる。本研究では、親の主観的なデータしか集めておらず、子本人の認知の調査や基準関連妥当性や再検査法の実施までには至らなかった。そこで、今後はこれらの点も含めた尺度のさらなる検討が望まれる。

注１）本研究は平成26～28年度日本学術振興会科学研究費補助金（萌芽研究（代表：藤後悦子課題番号･26590166））の助成を受けて行われた。

引用文献

Belsky, J.(1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development,* 55, 83-97.

Bronfenbrenner, U.(1979). *The ecology of human development: experiments by nature and design.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Brustad, R. J.(1993). Who will go out and play? Parental and psychological influences on children's attraction to physical activity. *Pediatric Science, 5,* 210-223.

Harwooda,C.G.& Knight, C.J.(2015). Parenting in youth sport: A position paper on parenting expertise. *Psychology of Sport and Exercise, 16 (1),* 24-35.

Holt,N.L,Tamminen, K.A., Black, D.E., Mandigo, J.L., &

Fox, K.R.(2009). Youth sport parenting styles and practices. *Journal of Sport & Exercise Psychology, 31,* 37-59.

三浦捷也(2013). 少年スポーツと教育の未来 角川学芸出版

藤後悦子・浅井健史・勝田紗代・川田裕次郎・藤後淳一・大浦宗博・関谷悠介・谷中風次・徳永裕典(2016). 中学生のバスケットボールットボールチームへの森田療法を用いた心理サポートの可能性 モチベーション研究, 5, 25-37.

藤後悦子・井梅由美子・大橋恵(2015).スポーツにおけるポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラスメント容認志向 東京未来大学研究紀要, 8, 93-103.

藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋恵 (2017).小学生の地域スポーツにかかわる親のスポーツ・ペアレンティング コミュニティ心理学研究 掲載予定

大橋恵・井梅由美子・藤後悦子 (2015). 地域スポーツにおける親子の喜びと傷つき―自由記述法による検討― 東京未来大学研究紀要, 8, 27-37.

(とうご えつこ・おおはし めぐみ・いうめ ゆみこ)

【受理日 2017年1月5日】